

## 第1回メコン地域ワークショップ

「人身取引被害者保護における MDT（多分野協働チーム）アプローチに関するワークショップ  
—地域の国々との経験の共有」

2010年2月23～25日の3日間、本プロジェクト開始以来最大のイベントともいえる、第1回メコン地域ワークショップを開催し、成功裡のうちに終わることができました。カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムのメコン地域各国から5名ずつ計20名の参加者を迎え、加えてタイのMDTメンバー、国際機関、地域NGO等からなるオブザーバー、など開会式の出席者を除いた参加者だけでも計87名という大規模なものでした。



(左) イサラ大臣 (右) 大西所長

開会式では、Issara Somchai タイ王国社会開発人間安全保障省大臣および Wanlop Ploythabthim 次官など省の高官も大勢出席されました。ご挨拶の中で大臣は、タイでは人身取引は国家課題として取り組んでいると述べられ、MDT強化を目指す当プロジェクトおよびワークショップの意義を強調されました。開会式で日本側を代表して挨拶された JICA タイ事務所の大西所長は、JICA は人身取引分野でこのプロジェクトのみならずメコン地域において活動していることを紹介されました。この機会に当プロジェクトのタイ国内での認知が高まっただけでなく、メコン地域に広く周知する良い機会ともなりました。

ワークショップの第一の目的は、タイで実施している被害者保護における MDT アプローチに関する知見と経験を周辺国と共有することにあ

りました。この分野では進んでいるタイの取り組みについて最初に背景と制度的説明をし、最後に事例に基づいてその実態を詳しく紹介できました。ワークショップの最後にタイ MDT メンバーは、メンバー間の信頼関係こそが MDT アプローチの基礎であると自信を持って述べていたのは実践から得られたゆるぎない信念といえます。参加者間のネットワークの強化もワークショップがめざすものでした。この点についても参加者は3日間の討議を通じて、お互いに一層親しくなったようです。共通のそして最終的な目的である被害者に対する保護の向上に向けて協力し合える基盤が作れたと思います。

各国の代表にはプレゼンテーションをしていただき、それに対してお互いに質問やコメントをするという形をとりました。各国とも法的、制度的には整備が進んできており政策レベルでは MDT に近いものがあるようですが、実務レベルでの実施に関しては今後の課題も少なくないようでした。また、予防やホットラインに関心が強かったり、被害者の保護やフォローアップに意欲を示したりと国によってそれぞれ関心があるところも異なっていました。

日本からは池内内閣官房参事官補に短期専門家として来ていただき、日本の人身取引分野での取り組みについてご



(左) 池内専門家

説明いただきました。参加者にとっては日本の対策を聞くのは初めてのことで、非常に関心が高く、多くの質問が出ました。タイの社会開発人間安全保障省の大臣秘書官もわざわざこの日本の報告を聞きにいらっしやったほどです。参加者からの質問は入国管理、労働搾取、被疑者の訴追、被害者の保護など非常に多岐にわたっていましたが、池内専門家はどの質問にも丁寧に答えてくださいました。これらのやり取りを通して、各国が自国の被害者の取り扱われ方について関心が高いことがうかがえました。また、池内専門家にとりましても、この問題に対するメコン地域各国における関心の高さと連携の強さは印象的だったようです。

プログラムでは、人身取引被害の話聞くセッションも設けました。女性の性的搾取の被害者および男性の漁船での強制労働の被害者の2名のタイ人が、自分がだまされた経緯と保護された後どのような支援を受けてきたか、さらに今後MDTのサービスを向上するためにはどのようなことが大切かを質問に答える形で述べました。被害者の一人は日本で性的被害にあった女性でした。お二人の被害者は、経験も保護の内容も異なっていましたが、このつらい経験を乗り越えて今後の人生を前向きに生きて行こうという思いと、自分の経験を他の人が被害にあわないように役立ちたいという思いは共通していました。

全てのプレゼンテーションの後、国毎に今回のワークショップの成果を自分たちの活動にどう生かすかについて代表に報告していただきました。各国からMDTへの高い理解とこれを今後の活動に生かしたいとの積極的な発言があり、力づけられました。またどの国も、国際協力の大切さを強調し、このワークショップを機会にさらに協力を強化したいとの考えを強く打ち出していたことも印象的でした。国際協力の枠組

みは、すでにUNIAPによるCOMMITTの枠組みがあるので、プロジェクトとしては、タイのMDTアプローチに特化しています。今後は、国内のMDTだけでなく国際的な実務レベルでのMDT担当者同士の交流を視野に入れる必要があると痛感しました。この分野でのJICAの支援を求める声も参加各国から出されました。



3日目はフィールド訪問で、女性と子どものためのシェルターと男性シェルターを訪問し、説明を聞いて施設見学をしました。シェルターはタイが誇る保護を体現する施設で、その立派さには皆目を見張っていました。残念ながら日本にはこれほど広大で長期的な受け入れ施設はなく、訪問するたびに少し悔しい思いをします。

女性用のシェルターではシニア・ボランティアの飯島さんが手工芸品作



成の指導をなさっており、参加者にその活動を紹介していただきました。参加者からはすかさず我が国にも彼女のような方の派遣をお願いしたいとの声が上がっていました。男性用シェルターの管理にあたっては、働き盛りの成人男性が保護され居住していることから、若い女性の



場合とは異なる問題も少なくないことをオープンに説明して下さいました。労働、所得獲得への強い希望、飲酒、入居者同士の諍いなどの問題もあるようです。どこの国でも共通する問題について知ることができたことは訪問のおかげだと思いました。

閉会式には JICA 事務所から山下次長が来て下さり、その前に行われた参加各国からの発表を聞いての感想も交えてご挨拶下さいました。今回のワークショップが新しい連携の始

まりとなることを希望され、一同同感しました。

日本も含め 5 カ国からの参加者を迎え、6 言語の通訳をつけての国際会議、さらに大臣のご出席となれば、その準備がどんなに大変かはお想像いただけると思います。各国からの参加者との連絡にあたっては各国の JICA 事務所の担当者に大変お世話になりました。ここに記してお礼を申し上げたいと思います。それが可能だったのは JICA が各国に事務所をもつ国際組織だったからでまさに組織の力だと思いました。多言語のコミュニケーションも課題でした。

このような複雑なワークショップの準備

を短期間でやり終えた BATWC のスタッフおよびプロジェクトスタッフの頑張りは誇りに思います。直前の 1 週間は戦場のようで、皆土・日も休まず働きました。またこのために何度も会議を持ち情報の共有化と準備の進展を確認しました。ワークショップの成果もさることながら、カウンターパートとの協働作業を通じて相

互の信頼関係が深まったことは、MDT 強化をめざすプロジェクトの進展のためには良かったと思っています。な

お、運営に当たっては UNIAP タイ事務所のスタッフにも協力していただきました。このような形で、他の国際機関と協力することも、JICA が国際的にプロジェクトを展開しているという印象を強化するのに役立ったと思っています。

